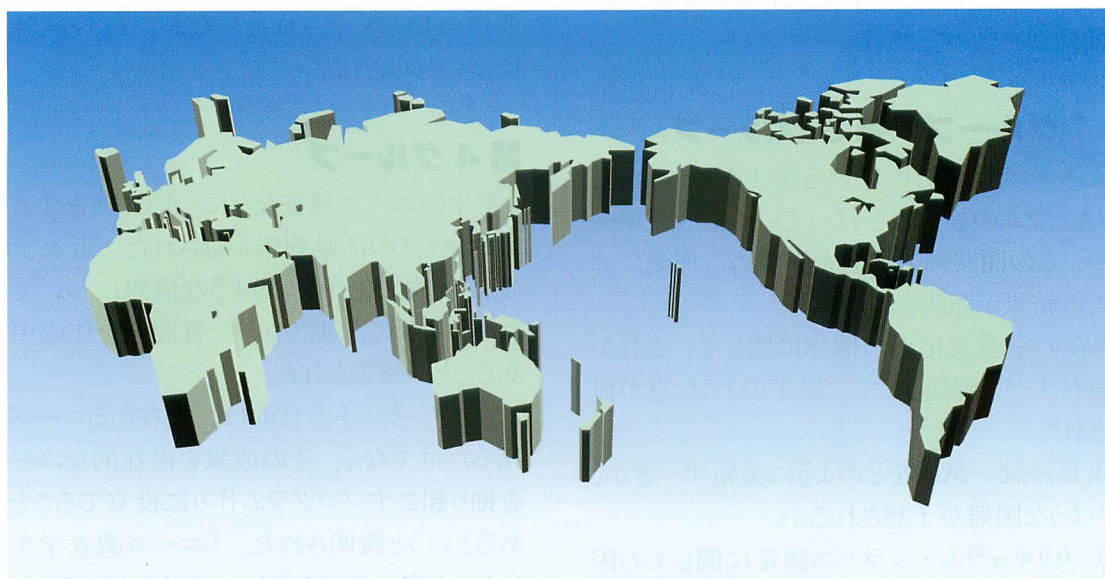


# ニュースレター 第2号

2008年10月発行

科学研究費補助金基盤研究(A)

## 大学における宗教文化教育の実質化を図る システム構築



### 目次

1. 各グループの活動報告 .....	2
2. 報告(1) 日本宗教学会パネル部会 .....	4
3. 報告(2) 国際研究フォーラム .....	5
4. これからの活動計画 .....	7
5. お知らせ .....	8

---

---

## 各グループの活動報告

---

---

下記のように第2回の全体会議が開催され、そこで、9月までの各グループの調査・研究、また今後の計画等について討議された。

### ○第2回全体会議

日時：2008年9月28日（日）

15時00分～18時45分

会場：國學院大學 学術メディアセンター

5階 03会議室

出席者 研究代表者・星野英紀（大正大学教授）の他、研究分担者、連携研究者、研究補助者を含め、25名。

### 第1グループ・第3グループ

全体の統括を行っている第1グループと、カリキュラムの検討など行っている第3グループが、この間共同で検討をすすめた作業についての結果が報告された。

現在の宗教文化士の構想に関して、これから検討すべき課題として、以下のような点が提示された。

(1) 最終統一試験をどのように実施すべきか、どのような困難が予想されるか。

(2) カリキュラム・シラバス認定に関する困難をどう克服していくか。とくに、資格取得仮要件の「20単位」が適切かどうか、またシラバス認定を進める上での具体的問題点はなにか。

(3) 企業ニーズをどのように探れるのか。

こうした課題提示とともに、宗教文化士を一種の「プレミア資格」として想定する案について検討したとの報告があった。

### 第2グループ

教材・資格認定試験の開発などについて調

査・研究している第2グループの活動報告では、現在、教材開発を中心に活動を行ないつつ、7月にホームページを立ち上げたこと、また同月『ニュースレター』の第1号を刊行したことが報告された。

教材に関しては、今後、従来のような書籍だけでなく、インターネット上で参照できる教材についてのリサーチも進めていく計画である。そして、映画を現代宗教の理解にどう役立てるかということテーマにした『映画で学ぶ現代宗教』を今年度中に刊行する予定である。また、近年はICT（情報通信技術）が進展しており、これからは日本の各大学でもネット環境が整備されていくことが予想されるため、それを意識した上での教材開発の必要性の提言もなされた。なお、最終試験の原案も配布された

### 第4グループ

学生のニーズ調査などについて調査する第4グループの活動報告がなされた。近々、学生に宗教文化士というような構想についてのニーズを聞く計画であり、質問紙を作成中であることが報告された。

このアンケートの目的は、現在あるニーズを探るだけでなく、その成果を潜在的なニーズを掘り起こすプログラム作りに役立てることにあるという説明された。「ニーズ調査学生アンケート案」が配布され、これをもとにアンケートの内容について説明がなされた。出席者たちによってアンケート案の検討が行なわれた。

なお、この調査実施に当たっては、第2グループと合同でなされる予定であることが述べられた。

### 第5グループ

外来宗教実態調査などを担当する第5グループの活動報告がなされた。

調査報告の一覧が配布され、各地域グルー

プ別（北海道・関東・中部・関西）の活動状況が報告された。

まず、北海道大学グループがアプローチ中の団体等（韓国系キリスト教会の宣教活動、台湾・中国系の宗教など）の紹介があり、次に関西グループがすでに調査した7つの教団等（タイ仏教、シーク教、ユダヤ教、モスクほか）についての説明がなされた。

今後、北海道大学グループは、インドネシアのイスラーム系の宗教的・社会事業団体、札幌市内の外来宗教等を、関西グループは、日系ブラジル人が多く住む群馬県大泉町や静岡県浜松市などを調査する計画である。

また首都圏での調査も考慮中であることが報告された。

## 第6グループ

宗教文化教育に関する国際的な研究交流を推進する第6グループの活動報告では、どの国との研究交流を推進するかについての計画が示され、今後の調査に赴く国とその概要が報告された。

本年10月、11月になされる複数のメンバーの海外出張を通して、イギリス・韓国・台湾・カナダ地域における宗教教育の実情や大学での宗教教育の授業等の調査が実施される。出張終了後には、調査報告が行なわれる予定である。

## 第7グループ

国外における関連の情報を収集する第7グループからは、国外での勤務経験のある人に対して、宗教に関する話題について聞くという趣旨のアンケートを試みたとの報告があった。

「アンケート案」も配布されたが、出席者による討議の結果、当面は量的に多くの事例を集めるよりも、質的な調査を優先させた方がいいのではないかということとなった。

そこで本年度はアンケート調査は実施せずに、実際に国外で勤務して、さまざまな異文化体験をした人や、国外の人とつねに接触して、宗教的な面での文化理解の重要性について感じている企業関係者、その他に講演などを依頼することとした。そうした人たちを通じての情報収集を図ると同時に、講演をしてもらう人にも、宗教文化士という試みに対する理解を得てもらうという方針が確認された。

なお、講演、研究会の類を開催する場合には、第2グループと共同して実施していく予定であることが報告された。

## ◇全体討議

全体討議では、第3グループにおけるカリキュラム調査の際の基準となる「そもそも宗教文化士とは何を指すものなのか」ということを、全体で決めておく必要性が提起された。

これに対し、現時点においては、修得が目指される「宗教文化」とは、「現代における生きた宗教文化」のことであり、歴史的な宗教文化を含むけれども、現代に継承されている歴史的側面を重視することになる、という点が確認された。

計画書にも記されているように、国外の宗教文化と自国の文化の双方の宗教文化が対象となるが、これを講義の中に盛り込んでいくときの具体的な問題点、とくにそれぞれの大学における教育の理念との関係などについては、今後全体での討議を重ねていく必要があるという議論がなされた。

また、カリキュラム・シラバスの認定についての議論も交わされたが、11月から12月にかけて予定されている学生に対するニーズ調査の結果などを踏まえながら、さらに検討を重ねていくことが確認された。

---

## 報告（1） 日本宗教学会パネル部会

### 「情報時代の宗教文化教育の教材」

去る2008年9月14日、筑波大学で開催された日本宗教学会第67回学術大会において、「宗教文化士」（仮称）検討委員会関連のパネルが開催された。タイトルは「情報時代の宗教文化教育の教材」であった。

セッション責任者・司会は井上順孝氏で、発題者は塩尻和子、平藤喜久子、藤原聖子、渡辺学の各氏、そしてコメンテータが磯岡哲也氏という構成で、すべて本科学研究費補助金による研究メンバーであった。

本パネルは、科学研究費補助金の7つグループのうち、(2)「宗教文化教育の教材についての調査・研究を推進するグループ」と(3)「宗教文化士の資格を目指すときのカリキュラムを研究するグループ」が中心になってパネルを企画したものである。

研究開始より発表時点までにおける調査・研究を踏まえ、現時点における問題点を明確にすることを趣旨とするものであった。

宗教文化教育を実質化する上では、現状の把握に努め、国際的視点からその具体的な方法について考えていく必要がある。現代日本における宗教文化に関わる教育の条件を考察する場合、インターネットに代表されるような従来とは異なる情報環境がどのような影響をもたらすかが大きなポイントとなる。また多文化が混在する度合いが高まると、対象とする宗教文化もきわめて多様となる。現状の的確な把握と、何がもつとも大きな課題かの認識が

必要になる。こうした点を踏まえて、各発題者がそれぞれ意見を述べた。

まず渡辺学氏は「宗教系大学における宗教教育の教材選択の問題点」と題して、キリスト教系大学における現状について説明し、宗教文化教育に相当するような科目が学生たちにどう受け止められるかについて述べた。学生によってはこうした類の講義を好まない可能性もあり、そうした場合を想定することも必要ではないか、という趣旨の提言を行った。

平藤喜久子氏は「インターネット上の宗教文化教育教材の現状と利用上の問題点」と題して発表し、インターネットの利用が学生の間では100%近いという状況を踏まえて、問題提起を行なった。最近のインターネット利用の傾向をグラフを示して紹介した。さらに学生の間ではウィキペディアの利用が急速に広まっており、ときに過度の依存も見られることも述べた。こうした現状においては、適切な宗教文化教育の教材をオンライン上でどう学生たちに提供するかというような発想が重要であると指摘した。

藤原聖子氏は「英米の宗教文化教育教材の展開とその問題」と題して、多文化状況が教育にも深刻な問題をなげかけているイギリスにおいて、どのような試みがなされているかを動画を用いて紹介した。その上で、国際的な視点から日本の状況を考える上での提言を行なった。

塩尻和子氏は「異文化教育の教材と問題点—イスラーム理解を中心に—」と題して、現在の日本の中等教育における倫理教科書を取り上げ、イスラームについての記述がまだ不正確な部分が多いことを具体的に指摘した。こうした不正確さをどのように是正するかのも、宗教文化教育を推進していく上で必要なことではないかと述べた。

以上の発題を踏まえて、コメンテータの磯岡哲也氏はそれぞれの発題者にコメントと質問を行なった。各発題者の提起の重要性を認めただうえで、それぞれから示された課題をどう乗り越えていくかについてのコメントを加えた。

また、他宗教についての授業を聞くことを嫌がる学生が多いという渡辺学氏の意見に対しては、少なくとも自分の経験ではあてはまらないという見解を示した。特定の宗教についてだけ聞くよりも、広く知りたいという要望をもつ学生の方が多いとし、むしろ検討されるのは授業の方法の方ではないかとした。

発題者とコメンテータとの質疑応答に続いて、フロアを交えての議論になったが、フロアからの質問は多岐にわたった。宗教文化教育の試み自体には、その意義を認める意見が大半であったが、実際にそれを行なっていく上で何に配慮しなければならないかについて、いくつか具体的な質問があった。最終試験作成の難しさについての意見も出された。

「宗教文化士」の資格化を目指す上での困難点についての質問がある一方で、こうした試みはもっと積極的に推進する姿勢を示したほうがいいのではないか、という意見も出された。

## 報告 (2)

### 国際研究フォーラム

#### 「ウェブ経由の神道・日本宗教

—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—

主催・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、共催・本科研プロジェクトの国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」が、去る10月26日(日)に國學院大學学術メディアセンターで開かれた。

以下にその概要を紹介する。

#### 【第1部 研究者フォーラム】

##### ・パネリスト

Carl Freire 氏 (University of California, Berkeley, USA)

Erik Schicketanz 氏 (東京大学大学院)

Laurent Godinot 氏 (INALCO, France)

岡田昭人氏 (東京外国語大学)

加瀬直弥氏 (國學院大學)

平藤喜久子氏 (國學院大學)

##### ・コーディネーター

黒崎浩行氏 (國學院大學)

午前中に開かれた第1部は、研究者フォーラムとし、外国の学生たちが神道、日本宗教を学ぶ際、あるいは学生たちに教える際に、インターネット上のコンテンツとしてどのようなものがあれば便利か、どのような問題が起こりうるか、あるいはどういった情報提供が可能かということテーマに討議を行った。

パネリストたちからは、博物館のウェブサイト

やYouTubeの活用の方法など、具体的な提案がなされたほか、大学の国際教育プログラムにおけるウェブの利用状況が報告され、神道関係のウェブサイトの紹介なども行われた。

全体討議では、宗教文化教育における知識教育と価値や判断力の養う教育をめぐる問題、初等・中等教育における宗教文化教育のありかた、ウィキペディアを安易に利用する学生たちにどうメディアリテラシー教育をしていくか、さらには教員のFD (Faculty Development) との関連など、海外の大学の例も出されながら活発な議論が行われた。

## 【第2部 国際研究フォーラム】

### ・パネリスト

Alan Cummings 氏 (SOAS, UK) 「日本古典芸能の教育におけるインターネットの可能性」

Michael Wachutka 氏 (Tübingen University, Germany) 「ドイツ語圏の日本宗教研究と教育：インターネットは教材・学材として使えるか」

Jean-Michel Butel 氏 (INALCO, France) 「日本の宗教および文化に関する信頼性の高いデータへのアクセスをより良くするために—実践的アプローチの観点から」

### ・コメンテーター

師茂樹氏 (花園大学)

渡辺学氏 (南山大学)

### ・司会

井上順孝氏 (國學院大學)

午後に学術メディアセンター1階常磐松ホールで一般公開で催された第2部では、3人の国外の研究者による報告が行なわれた。

Cummings 氏は、近年の歌舞伎に関するウェブ

サイトを題材に、教材として必要とされているコンテンツについて提言を行った。そして、メディアに敏感になっている現在の若者にとっては、テキスト中心ではなく、視覚や聴覚にうったえかける内容である必要がある。そうしたハイブリッド・リテラシーについて、ウェブ制作者は理解しておく必要があると指摘した。

Wachutka 氏は、ドイツの日本学・日本宗教研究の状況について説明した上で、テュービンゲン大学のサイバー宗教プロジェクトや、ベルリン東洋美術館による「熙代勝覧」のデジタル化の取り組みについて報告した。現在の問題点として初心者用のサイトがないことなどが挙げられた。

Butel 氏は、フランスの大学の状況を事例に、日本文化・日本宗教の教育の現状について報告した。学生たちのおもな情報収集のツールは、Google、Wikipedia、Amazon が主となっているが、海外で日本宗教を学ぶ初学者のためのテキストの作成や、海外の研究者への日本側のサポートなどの要望が述べられた。

第2部でもコメンテーターの2人に加えて、フロアからも数多くの意見が寄せられた。宗教文化教育という言葉の意味とその目指すもの、インターネットや新しいメディアの発達による大学教育や調査研究の変化にいかに対応していくべきか、各国における宗教文化教育の状況、などの諸問題について議論が交わされた。

日本の初等・中等教育における宗教文化教育と海外の人々への日本宗教の紹介には、重なり合う課題も多く、研究者間の国際的なネットワーク形成が必要であることがあらためて確認された。

## これからの活動計画

### (1) アンケート調査

第2回全体会議でも話し合われた学生へのアンケート調査が、11月から12月にかけて実施されることとなった。

第4グループ（幹事：弓山達也；宗教文化教育に関する学生や社会のニーズ調査）と、第2グループ（幹事：井上順孝；宗教文化教育教材の研究）とが共同でアンケートの調査票の原案を作成した。さらに本科学研究費補助金のメンバーに意見を求めて修正したものを最終的な調査票とした。その結果、調査項目は11項目となった。

この調査の主な目的は学生の持つ宗教文化への関心の現状を把握することにある。調査では、学生の宗教文化そのものへの関心や、宗教文化関連の講義に対する学生の興味の多様性などが測られると共に、宗教文化に対して学生が持っているイメージも捉えようと試みる。

具体的な質問内容としては、どのような宗教文化に関する事柄に関心があるのか、どのような宗教文化に関する講義内容に惹かれるか、どのような職種にとって宗教文化は必要だと思うかなどである。また実際に宗教文化士資格が創設された場合の資格取得の意思の有無、どの程度積極的に期待しているかなどについても質問してある。

これらの結果は学生が宗教文化教育に対し

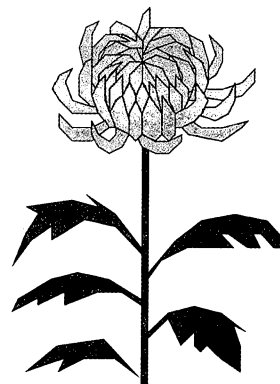
て持つ関心の現状を把握すると同時に、宗教文化教育への潜在的なニーズを掘り起こすプログラム作りにも役立つと考えられる。

アンケート調査は、本科研のメンバーにより実施されると共に、1995年以来「宗教と社会」学会と國學院大學日本文化研究所が共同で実施してきた「学生宗教意識調査」の調査メンバーにも協力を求めることになった。

宗教系、あるいは人文系といった学生に限らず、法律、経済、さらには自然科学系の学生をも対象にし、出来るだけ広い分野にわたる学生が調査対象となるよう配慮する。そのため、調査を実施する授業も配慮し、可能であれば、メンバー自身のみならず他学部の教員への調査協力も要請することとなっている。

調査票の発送は10月末、具体的な調査時期は11～12月となる。回収した調査票は順次データ入力作業にまわされ、来年1月末までに結果を集計する予定である。

（ご関心のある方はニュースレター発行元までE-mailでお問い合わせ下さい。）



## (2) 研究会

### ○海外勤務経験者の話を聞く会

講師

宮本真一氏

財団法人・海外技術者研修協会  
EPA担当室部長

田中健二氏

中間法人・アジア太平洋フォーラム  
理事長

日時：2008年11月6日（木）

午後6時半～8時半

場所：國學院大學学術メディアセンター5  
階06会議室

テーマ「異文化社会の駐在体験—南アジア  
を中心に—」

講演ののち、意見交換の場をもちます。宮  
本氏はインド（ニューデリー）に駐在されてい  
ましたが、パキスタン、スリランカ、バングラデ  
シュについてもカバーされています。

田中氏はアジア太平洋フォーラムの理事長  
として、中国をはじめ、アジア各国、さらに北米、  
ロシアの関係者と交流を継続しておられます。  
そうした経験に基づいてのコメントをいただきま  
す。

## 5. お知らせ

### ○第3回全体会議

日時 2008年12月を予定

議題 研究・調査の報告、その他

### ○関連会議等

・第34回 日本文化を知る講座（全4回）

「現代人にとっての神々の物語—教材と  
しての神話—」

11月8日：「風土記の魅力」

飯泉健司（埼玉大学准教授）

11月15日：「日本神話をどう教えるか」

平藤喜久子（國學院大學講師）

11月22日：「神話としての創世記」

月本昭男（立教大学教授）

11月29日：「檀君神話と韓国」

丹羽泉（東京外国語大学教授）

各日とも13:30～15:30

場所：國學院大學渋谷キャンパス

受講料：無料

定員：150名（先着順）

⇒問い合わせ先：kikou@kokugakuin.ac.jp

\*この講座は、國學院大學研究開発推進機構  
の主催ですが、本科学研究費補助金による研  
究との連携企画です。

科学研究費補助金基盤研究（A）

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

（研究代表者 星野英紀）

発行 大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学

発行日 2008年10月31日

URL：<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>

E-mail：[infoshubun@kokugakuin.ac.jp](mailto:infoshubun@kokugakuin.ac.jp)